第26回 ジェネリックと未病

Text by 福生吉裕

還付金?

例によって午後のひととき、診察室でうとうとしていると、「先生、1週間前に会社の保険組合からこんな通知が来たのですが、これって還付金? 戻るのですか?」。ちょっと気色ばった顔で一通の手紙を持って現れたのは山本政男さん(56歳・仮名)でした。その手紙には「ジェネリック(後発)医薬品差額通知書」と書かれております。広げてみると、そこには山本さんが飲まれている薬名とその代金、それに対応するジェネリック医薬品の代金の差額が書かれていました。締めて1566円の減額です。

お得な薬

「いやいや、これはお金が戻るのじゃないな。残念でした。こちらのちょっと難しい名前の薬にすると、それだけ安くなるという知らせなんだよ」

「なんだ、お金が戻ってくるのじゃないのですか。知らない名前だけど、これ同じ薬ですか? 効くのですか?」

山本さんは血圧の薬と高脂血症の薬を飲んでいます。そして血圧を測ると128/82、自覚症状はほとんどありません。

「以前は少し頭が重かったと言っていたが、どう?」「最近はすっかり無くなりましたね。身体も軽くなった感じですよ」

どうやらコントロールはいいようです。

「それじゃ、こちらの薬にしてみようか。効果は同じなんだよね。続けるんだよ」

「わかりました。先生、1500円あれば一杯飲めるね」

山本さんは満足な顔になりました。これで山本さんとはラポール(信頼関係)な関係が生まれたのです。

ジェネリックという薬

さて、少子高齢社会といわれて久しくなりました。人口減少時代に入ってきているとメディアは警鐘を鳴らします。医療費は右肩上がりに年間42兆円に届き、2025年には56兆円にまで膨らむと厚生労働省では予想しており、このままでは社会保障は続かないということに。空恐ろしい現実がいつかは訪れる可能性があるのです。

そこで窮余の一策として取り上げられたのがこのジェネリック医薬品の推奨でした。すべての薬をジェネリック医薬品に替えると、約1兆5000億円の医療費が軽減されると試算されています。

医薬品の開発には20年間、約500億円もの時間と莫大な資金がかかるといわれます。製薬会社はそれを取り戻すのに特許期間で守られ、その間薬の値段は高いままです。新薬の開発のおかげで人間は病魔との戦いに勝ってきた歴史があるのも確かでありますが、人口構成が逆ピラミッド型になってきている現在、背に腹は替えられないということもあります。そこで特許が切れると臨床治験をせずに同じ成分の薬を売り出せる仕組みを考え出したのです。この薬がジェネリック医薬品です。値段は先発薬に比べ半額近くなります。

未病との相性

健康と病気の間に未病という状態を見いだし、早期に自己チェックして病気になるのを防ぐという未病の考えも、この超少子高齢社会の到来に備えての一策です。互いに医療費の増加を抑え次世代へ国民皆保険の持続をはかろうというもの。未病とジェネリック医薬品との見ている方向は似ています。相性はよいのです。今、ジェネリック医薬品の服用は社会貢献にひと役買っているといえる時代ではないでしょうか。

ふくお・よしひろ (一財)博慈会老人病研究所所長。少子高齢社会における未病ケアシステムの構築を提唱している。21世紀医療課題委員会代表。著書に『臨床判断ハンドブック』『見た目で病気がわかる』『未病息災』『セルフ・メディカ』など。